

男性同性愛表象としての BL をめぐる言説とコミュニケーション
—やおい論争から現在まで—

国際日本学研究科 国際日本学専攻 ポップカルチャー研究領域

4911161002 岡田 夏実

本論文は、クィア研究的視点から「やおい論争」をはじめとした男性同性愛表象としての BL をめぐる議論とそれに関わる言説、コミュニケーションを分析することで、男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる議論やコミュニケーションが常に他者との対話による変化を伴ってきた一方で、〈女性向け男性間恋愛フィクション〉を愛好する主体のセクシュアリティの多様性やクィアな連続性については不可視化されてきたことを論じた。

本論文の目的は、先行研究で検討されていない「やおい論争」とそれに続く男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる議論の流れを改めて整理し、その意義を検討すること、2000年代の「腐女子」言説とヘテロセクシュアリティの関連性を明らかにすること、それらを踏まえ男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる実際にどのようなコミュニケーションが行われているか、性的マイノリティの〈女性向け男性間恋愛フィクション〉愛好者はどのような人々であるのかを調査すること、そしてそのような〈女性向け男性間恋愛フィクション〉、特に2000年代中盤以降の商業 BL マンガの表現の変化がどのようなもので、どのように読まれているかを分析することである。

本研究では、「BL」「腐女子」などに関して言説分析を行うため、一般的な定義や語の使用の問題点を確認した後、少年愛・JUNE・やおい・BLを総称する包括的用語として独自に「〈女性向け男性間恋愛フィクション〉」という語を設定した。

「やおい論争」を発端とする男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる議論を、5人の論者の主張の変化を焦点にして分析することで、男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる議論において、ゲイ男性（あるいはゲイ・レズビアンスタディーズ）と〈女性向け男性間恋愛フィクション〉愛好者は対話によってお互いに変化してきたことを明らかにした。

やおい論争（1992～1996）はフェミニズムのミニコミ誌『CHOISIR』上で行われた〈女性向け男性間恋愛フィクション〉の差別性をめぐるゲイ男性と愛好者による論争である。やおい論争の最初の投稿者であるゲイ男性の佐藤雅樹が「ヤオイなんて死んでしまえばいい」と書いたことでセンセーショナルに受け止められた。またやおい論争は当時のゲイ・リブ運動の高まりとゲイ・ブーム、商業ジャンルとしての BL の勃興という限定性の高い文脈の中で行われていた。

佐藤に続いて〈女性向け男性間恋愛フィクション〉批判を行ったキース・ヴィンセントは、やおい論争ではなく自身の「やおい」制作者たちとの出会いからゲイが過剰に美化されることを危惧したが、小谷真理との対談の中でやおい論争をゲイとフェミニズムがいかなる関係を築いていくかという問題だととらえている。その後、2007年の論文では佐藤がやおい論争を通じてフェミニズムへの理解を深めていったことを評価する一方で、ゲイを単なる記号としてしか描かないやおいの作品はホモフォビアに対抗できないと批判している。石田仁は従来の議論とは異なった切り口から男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋

愛フィクション〉をめぐる問題提起を行った。石田が問題とするのは、「腐女子」の「批評を拒絶する態度」であり、「やおい／BL」がゲイ男性を参照し「表象の横奪」を行っていながらも「やおい／BLはファンタジーであり、現実のゲイとは関係ない」と主張し批判を回避していることを主張している。これに対し、堀あきこは「やおいにおけるゲイ男性への参照は究極の愛を描くための装置でしかない」反論したが、一方でゲイと「腐女子」の間の「共闘可能性」も示唆した。こののち石田は2007年の論文が英訳される中で一部改稿し、BL作品の新しい傾向を紹介しつつやおい／BL研究者による表象の横奪」に対する反論としてやおい／BLが「女性の自律的欲望」に基づいているという主張に対しては、「表象の横奪」であることと「女性の自律的な欲望」であることの双方がやおい／BLに不可欠なものであると主張した。

これらの議論を踏まえ、溝口はやおい論争の再評価を行っている。佐藤雅樹が実際にはゲイと女性の間で議論を巻き起こし、両者の関係を再考する機会を提供するためにあえてこのような過激な文章を書いたということを明らかにし、やおい論争をゲイ男性とBL愛好家女性の対話の機会としてとらえた。

インターネット上における近年の新たな論点から、男性同性愛表象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉をめぐる議論がゲイ男性と〈女性向け男性間恋愛フィクション〉を愛好する女性の間で留まらないより広いグローバルな社会に位置付けられていくことを示唆した。

一方で、90年代までゲイ文化や「ゲイ・ブーム」との連続性においてとらえられていた〈女性向け男性間恋愛フィクション〉が、「オタク」との結びつきによってそれらと分離し、2000年代の「腐女子ブーム」を通じて、その愛好者が「腐女子」という特定の人物類型として構築されていくなかで、〈女性向け男性間恋愛フィクション〉とその愛好者から「腐女子」とその趣味の対象としての〈女性向け男性間恋愛フィクション〉という逆転が起こったことがわかった。このような「腐女子」はフェミニズムの成果としてのキャリア女性と対比される中で、また交際する男性の目を通じて描き出される中で、異性愛規範的な「男性と交際する「普通」の女の子」として立像されていった。

これらを踏まえ、実際のコミュニケーションと従来不可視化されてきた性的マイノリティの〈女性向け男性間恋愛フィクション〉愛好者について、「レインボーリール東京」における参与観察という方法を用いて調査した結果、「腐女子」像にあてはまらない〈女性向け男性間恋愛フィクション〉の愛好者や読者の存在や「腐女子」と性的マイノリティの文化的混淆を確認でき、「腐女子」言説が〈女性向け男性間恋愛フィクション〉のクィアな文化的広がりや隠ぺいしてきたことが明らかになった。また、「レインボーリール東京」では「占有」を回避し性的マイノリティ当事者のための空間を確保することと非当事者に開かれた空間を提供することをめぐるせめぎあいが行われており、またその物理的空間としての側面によって「ゲイ男性と「腐女子」が「顔のある他者」として出会い、そしてそのことによって自己認識を新たにするような「場」であることを主張した。

最後に、参与観察で見られた「レインボーリール東京」に集う人々の支持する「BL」作品の傾向から、2000年代中盤から生まれた新しいBL表現である「ニューウェーブ」の特徴について、その先駆的存在である東京漫画社初期作品を日常性と男性身体という二つの側面から分析し、これらの作品が従来までの「王道」と呼ばれる主流派の作品と異なり我々の現実と地続きであるような作品世界を模索してきたことを論じた。